

## 50歳で初制覇

# おじさんは元気だ

最年長V 手嶋多一（ミズノ（株））



昨年、20年以上守り続けたレギュラーツアーのシード権を手放した手嶋だが、気力は充実している。失ったことで逆にリセットしたのかもしれない。今年4月、シニアとして初めて出場した大会、開幕戦の「金秀シニア沖縄オープン」で優勝。5月には「全米プロシニア」にも出場し、18位に食い込んだ。この大会が手嶋のゴルフに対するやる気をアップさせた。「ビージェイ・シンらと回って（米国で）やってみたいなあ」。東テネシー大出身の手嶋は米国に6年間過ごした経験もあり、そのハートに火がついたわけだ。50歳と言えば、年齢から来る肉体の衰えとの闘いも出てくるが、気持ちが前向きというのが、今回の優勝につながった部分もあるだろう。

「絶対に優勝はない、と思っていた。この大会は思い入れも深いし、九州のプロとして1度は勝ちたい、と思っていた」と素直に喜びを表現した。日程などがレギュラーツアーと重なり、プレーヤーとしてピークの頃は参加できないことが多かった。唯一のチャンスは1998年。山本恒久らとのプレーオフとなったが、敗れた。

練習ラウンドもせず、25年ぶりに回った西日本CCで初日1オーバー71。「分かった。攻める所と刻む所が、ね」と試合後に語ったが、その通りに実践

し、スコアに結び付けて行く。2日目は7アンダー、1ボギーのベストスコア65をマークして初日の37位タイから一気に2位タイに上昇。3日目も66のナイスラウンドで単独首位を奪った。そして、迎えた最終日。最終組はともに20歳代の若い三重野里斗と成松亮介。明暗を分けたのは7番ミドル(436ヤ)だ。その前の6番ミドル(390ヤ)で2人はバーディーを奪い、3パットの手嶋と通算11アンダーで並んだ。ところが、2人は第1打をともに左OBしてダブルボギー。手堅くパーにまとめた手嶋と2打差がつくのだが、この差が縮まることなく、試合は終了した。

「シニアになりましたが、まだ現役でバリバリやります。来年も九州オープンに戻って来ます」と優勝インタビューで語った。暑かった4日間を体力を温存しながら見事に乗り切った50歳の手嶋。来年は連覇と自己の持つ最年長優勝の更新がかかる。



【第3ラウンドの最終組。左から手嶋、成松、1人おいて諸藤】

## <ひとこと>

三重野里斗(首位から2打差の2位)「後半チャンスもあったけど、手嶋さんの

17番のバーディーで終了しました。僕の方が近かったんですが、10位くらいを決めて。手嶋さんはいつも表情がゆったりしていて、自分のペースを持っている。しゃべりかけても通用しませんでした」

成松亮介（首位から3打差の3位タイ）「手嶋さんはゴルフがうまい。ボギーを叩いても、すぐにバーディーで取り返すし。4日間、優勝争いができて、いい勉強になりました。これをプラスにして、次こそは勝ちたい」

小浦和也（通算9アンダーで3位タイ）「日本オープンの最終予選に出れるし、またチャレンジできる。このモチベーションを持続して、本戦に行けるように頑張ります」

比嘉一貴（昨年の覇者は通算8アンダーで5位タイ）「連覇はしたかったですけどね。今の精一杯のゴルフはできたと思います。流れが悪かったし、つかめませんでした」

井戸川純平（通算4オーバーで初のローアマを獲得）「疲れしました。4日間いいゴルフができたし、自信になります。今までに経験したことのない暑さでした。精神的にも疲れしました」